
バカとテストとラッキー スター

アスタリスク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとラッキー スター

【Nコード】

N9522W

【作者名】

アスタリスク

【あらすじ】

バカテストとらき すたのクロスオーバー！
柊かがみを除いた泉こなたと柊つかさと高良みゆきはある諸事象でFクラス入りする。そこで出会った吉井明久たちとほのぼの(?)
とした物語が始まる！

こなた「さあ、始まるぞますよ?」
みゆき「いくでがんす?」
つかさ「ふんがー!」

かがみ「まともに始めなさいよ！」、
「
」

キャラ紹介（召喚獣の設定込み）こなた・瑞希追加（前書き）

キャラクターの設定です。話がすすむにつれ、キャラや設定が追加されていきます。

キャラ紹介（召喚獣の設定込み）こなた・瑞希追加

文月学園（ふみづきがくえん）

本作の舞台となる学園。革新的な学力低下対策として、「試験召喚システム」を実験導入している。また、進学校であると同時にそのシステムの実験場でもある。

スポンサーが多くついており、そのため学費が極めて安い。だが、そのせいで生徒を大量に取られたせいで近隣の高校からは目の敵状態。

試験校でもあるため、世論に運営が左右されやすいという問題点がある。

吉井明久（よしいあきひさ）

本作主人公。2年Fクラス所属。胸ランクノ野郎のなんざ知りたくねえ。

学園創設以来初の「観察処分者」。その頭の酷さはバカにすることでか同情すら覚えてしまうほど。己の頭の酷さは自覚してはいる。嘘すらまともにつけないために、雄二など、小ズルイ事などに頭の回る人間には利用されがち。

それゆえに極度までバカにされると落ち込む。が、つかさのおかげで少しは前向きになった。

鉄人西村から逃げるために、学園の様々な場所の地形などを把握している。

召喚獣ステータス

ユニットクラス B a d s t u d e n t

装備 頭 なし

体 改造学ラン（黒）

足 なし

武器 木刀（櫟の木製）

腕輪 ???

柊つかさー（ひいらぎー）

本作ヒロインのひとり。2年Fクラス所属。胸ランク/2

柊家の四女。優しく、思いやりがあるが、その反面弱気などところがある。姉であるかがみとの能力の差に小さい頃はかなりのコンプレックスを抱いていた。が、現在はそれも立ち直りつつある。かがみからFクラス男子（明久など）に関わるなと言われていたが、ある一件からそれは間違いだと思ふようになる。

召喚獣ステータス

ユニットクラス Gentle cook

装備 頭 ライトグリーン 三角巾

体 チェックのエプロン（赤・白）

足 文月学園の上履き

武器 鍋蓋・フライパン

腕輪 ???

高良みゆきー（たからー）

本作のヒロインの一人。2年Fクラス所属。胸ランク/5

主要メンバーのなかで、唯一の電車通学をしている。だが、それが原因でFクラス入りになった。

つかさ同様優しく、思いやりがある。心の広さはかなりのもので、一部の生徒から「聖人君子」とまで言われる。

成績は優秀であり、学園のトップクラス。また、ソレに加え雑学

なども達者である。

召喚獣ステータス

ユニットクラス Intellectual magician
an

装備 頭 魔術師の三角帽子

体 魔術師のローブ

足 魔力溜めの靴

武器 聖者の杖

腕輪 ???

泉こなた一（いずみこ）

本作の主要人物の一人。 2年Fクラス所属。 胸ランク/1

漫画やゲームなど、様々なそういったものが好きないわゆるオタク。 様々なものをゲームやアニメに例えることがある。

土曜日に振り分け試験があったため、それを忘れて積みゲー崩しをしていたためにFクラスになった。 ちなみに、文月学園に入学したのは試験召喚戦争に興味があったため。

ぼんやりしているようで、実は結構鋭い。 両利きである。

つかさの中に芽生えたとある感情の萌芽の存在にも実は既に気がついている。

召喚獣ステータス

ユニットクラス Capricious fox

装備 頭 なし

体 赤銅の鎧

足 赤い足甲

武器 レーヴァティン

腕輪 ???

姫路瑞希（ひめじみずき）

本作の主要人物の一人。2年Fクラス所属。胸ランク/5

原作のメインヒロイン。

努力家であり、学年トップクラスの成績はその賜物。おしとやかで育ちもいい。（色々な意味で）

作者の書くバカテス作品の中では唯一特別扱いな設定は無く、立ち位置やなども原作そのまま。Fクラス入りは試験中に体調不良での途中退席によるもの。

召喚獣ステータス

ユニットクラス Allrounder rabbit

装備 頭 ハートの髪飾り

体 白銀の鎧

足 白銀の足甲

武器 白銀の大剣

腕輪 熱線

突っ走るバカ（前書き）

さあ、始まり始まりー！

突っ走るバカ

文月学園。

それは、今現在世界で最も注目を集めている進学校である。注目を集めている理由としては、その学園のみにある特殊なシステム、『試験召喚システム』という存在である。科学と幾ばくかの偶然、そしてオカルトの要素が混ざり合い誕生したこのシステムは、学業低下が嘆かれる昨今の日本の教育社会に新風を巻き起こすものとなるかもしれない。

かもしれない、というのはまだそのシステムが発展途上にあるからである。いわば、文月学園にある試験召喚システムはプロトタイプと呼ばれる代物なのだ。そして、プロトタイプである以上、未解決の問題やまだ見ぬ、現れぬトラブルなどの心配がある。だから、そういったトラブルなどがあるかもしれない発展途上のこのシステムを試験的に採用し、そういったトラブルの除去や問題のクリアのために、事実上の実験校としてその試験召喚システムを試験運用しているのが文月学園なのである。

そして、注目をされている以上、その注目に応えなければならぬ。そのために、文月学園は普通の高等学校などには無い取り組みを行っている。その取り組みの一つが学年末試験の次に行われるクラス振り分け試験だ。この試験の結果によって次の学年の所属クラスが決まる。しかし、決まるのは何もクラスだけではない。他に決まるのは、自身が所属するクラスの“設備”である。上位のクラスであればより豪華な設備を、下位のクラスであれば眼を覆いたくなるような貧相な設備が与えられる。

傍から見れば差別にしか見えないこの設備の差。この差が生徒のハングリー精神を奮い立たせ、その果てに他の高等学校では決して真似できない取り組みが行われる。それは――

試験召喚戦争である。

Chapter 1 バカと不安と萌えをその手に、戦う者たち

第一話 突っ走るバカ

春。

ある人によつては、新たな学年や新しい仲間、もしくは新生活が始まる季節。

ある人によつては、これから、もしくは既に猛威を振るっている花粉と戦う季節。

ある人によつては、恋が始まるカウントダウンが始まる季節。そんな春の季節の中、彼女、泉こなた、柊つかさ、柊かがみ、高良みゆきは上記の三つで言えば一番目に該当する。彼女達は今年で文月学園の二年生となる。そんな彼女達は現在、今年で二度目となる桜並木の坂道を歩いていた。そして、何気に急なその坂道を登りきった彼女達四人組はようやく文月学園の校門へと辿り着く。

「遅いぞお前達。もうすぐ予鈴になるぞ？」

そんな彼女達にそう告げるのは、筋骨隆々の、まるで鋼鉄のような肉体を持った男性だった。鍛えに鍛えた有り余るその筋肉は、着ている黒のスーツをからでも窺い知れる。男の名は西村宗一郎。その体つきや趣味であるトライアスロンから『鉄人』と影で言われ、生活指導の鬼として生徒から恐れられている。

「おはようございます。3年A組鉄人先生」

「……泉。いきなり新学期早々補習室に行くか？」

「ぎよえ！ それは勘弁です！」

そんな鉄Ｚ……西村教諭とそんなやり取りをするのは、腰はおろか膝まで伸びた超ロングヘヤーの青い髪にアホ毛、左目の泣き黒子に小学生のような身長と体軀をした泉こなただ。一応彼女の名誉（？）のために言っておくが、彼女はちゃんと年齢どりの高校二年生である。別にどこかの見た目は子供、頭脳は大人な名探偵でもなければ、どこかのマセガキの言葉を悪い意味で体現している金髪ツインテの飛び級生でもない。

「こ、こなちゃん。ちゃんと挨拶しないとダメだよっ」

そう言うのはライトパープルのボブカットの髪に黄色のリボンをかチューシャ風に付けたどこか気の弱そうな感じのある柊つかさだ。彼女を嗜めてはいるものの、オドオドしているためにどこか頼りなさがある。

「全くアンタは……。挨拶ぐらいちゃんとやりなさいよね」

そうキツめに言うのはつかさと同じライトパープルの髪をツインテールにしている柊かがみだ。苗字を見れば分かると思うが、つかさとは姉妹関係にある。一応かがみの方が姉だ。

「まあ、かがみさん。泉さんも悪気があって言っただけでは無いですし」

そうこなたを擁護するのは腰まであるライトピンクに髪に丸眼鏡、そして制服越しでも分かる豊満な胸を持った高良みゆきだ。その知性を感じさせる雰囲気と大体のことをプラス思考に考える優しさか

ら、かがみを始めとする一部の生徒からは『聖人君子』と呼ばれている。

「まったく、お前というヤツは……。まあいい。ホレ、受け取れ」

そう言つて西村教諭は脇に抱えている箱から四人の名前が書いてある封筒を取り出しそれぞれに渡す。渡された四人はそれぞれの封筒をマジマジと見て、封を開けようと……

「遅いぞ、吉井！」

「うげ、鉄人！？」

したところで、西村教諭と吉井と呼ばれた生徒の対話でその手が止まった。

「誰が鉄人か、西村先生と呼ばんか」

「あはは、すみません」

「まったく、それはそうと受け取れ」

そう言つて西村教諭は四人と同じように彼、吉井明久に封筒を渡した。

「それにしても、なんでまたこんな面倒なやり方でクラス分けを発表するんです？ 普通に大きな紙を貼り付けて発表すればいいのに」

「普通はそうするんだがな。ここは世間から注目を集めている学園だ。少しでも他の高校とは違うことをしたいんだそうだ」

「そんなもんですかね……」

「ところで吉井、実はな。俺は去年の一年間お前を見てきて、もしかしたら吉井はバカなんじゃないか？ と、疑いを持ってきたんだ」

そんな西村教諭の言葉に、明久はアハハッと笑って返す。

「それは大きな間違いですね。その内『節穴』なんてあだ名がついちやいますよ?」

「まったくだ。そう呼ばれても言い返せん。喜べ吉井、お前への疑いは無くなった」

その言葉とほぼ同時に、明久は封筒からクラスの書かれた用紙を取り出し、見た。

『吉井明久 Fクラス』

「吉井。お前は疑いの無いバカだ」

明久の肩にポンツと手を置き、西村教諭はそう告げたのだった。そんなやり取りを見ていた四人は、途端に己のクラスがどこなのか気になり、封筒から用紙を取り出した。

「皆はこのクラス? みゆきはAクラスでしょ?」

かがみは自身の『終かがみ Aクラス』と書かれた用紙を三人に見せながら聞いてくる。しかし、そのほとんどが彼女にとって予想外の結果だった。

「その、すみませんかがみさん。ご期待に沿えることができて」

そう言ってみゆきは自身の紙をかがみに見せる。そこには――

『高良みゆき Fクラス』

とあった。

「ちょ、なんで!？　なんでみゆきがFクラスなの!？　みゆきって私より成績良い筈でしょ!？」

「あの、じつは試験当日。電車が事故で遅れてしまいまして。ようやく来た電車に乗って、一応こちらには来たのですが、遅刻が理由で試験を受けられなくて」

「なによそれ!？」

みゆきが告げた事実、かがみは驚くと同時にちよつとした苛立ちがあった。その苛立ちは遅刻ぐらいで、しかも寝坊とかではなく事故というちゃんとした理由があるというのに試験を受けさせてくれなかった学園に対してである。

だが、かがみの驚きはこれで終わらなかった。

「あれ？　みゆきさんもFクラスなの？」

そうこなたが言ってきたからだ。そう、みゆきさん“も”と。

「ちよつと待ちなさいよ。まさかこなたもFクラスなの!？」

「うん。ホラ」

そう言つてこなたは用紙をかがみのみならず、みゆきとつかさにも見えるように見せる。そこには確かに『泉こなた　Fクラス』とあった。

「ちょ、何でアンタまで!？　アンタって一夜漬けとかで結構な点数取れるんじゃないの？」

「いや、実は土曜日に試験があるの忘れてて積みゲー崩ししてた

(=ω=・・)」

「おいちよつと待て！ アンタのは完全な自業自得じゃないか！」

意外すぎる事実にかがみは最早呆れ、怒鳴るしかない。そして、かがみは更にいやな予感がしたのだ。

「あ、あのさつかさ？ アンタもFクラスなんてこと無いわよね？」

恐る恐るといった感じで妹であるつかさを見る。そして当のつかさは気まずそうな顔をして――

「えっと、ごめんねお姉ちゃん」

そう言つて『柊つかさ Fクラス』と書かれた紙を見せた。

「アンタもかい！」

「えへへ、実は試験のときにね？ 問題の答えが一問ずつずれてるのに気がついて」

「わかったもついい。皆まで言つな」

大方、ずれてた答えを直してる内に時間切れになったと言つてころだろう、とかがみは中りをつける。回答のずれに加え、つかさ自身成績はあまり良くないこともありこうなつたと言つたところかと。

「それはそうとお前達。もう予鈴が鳴つてるぞ？ 早く教室に行け」
「え？ ああ、はい」

言われてみると、既に予鈴がなっている。早く行かないと新学期早々遅刻してしまう。そう思った四人は、慌てて昇降口へと向かった。

去年はほとんど来た事が無い三階へ足を踏み入れた四人の前に、一人の男子生徒がいた。その男子生徒は明らかに他とは違う大きな教室の中を覗きこんでる。

『うわあ、すごい。リクライニングシートにシステムデスクに……あ、ノートパソコンに個人冷蔵庫まである！』

そんなことを誰にと無く呟いているのは、先ほど西村教諭からバカ認定を喰らった明久である。どうやら三階にあるこの教室に興味を持って覗いてるといったところだろう。

こなたとつかさとみゆきはそんな彼の行動にちよっぴりとだが驚いている。そんな中、かがみだけが唯一三人とは違う視線を向けている。

「……………」

その視線には、明らかな嫌悪が籠っていた。

『おっと、そろそろ行かないと』

そう思い出したように明久は覗くのをやめ、自身の教室へと足を向けた。そんな彼を見て、四人もそれぞれの教室へと足を向ける。そして、Aクラスの扉を手に掛けた所で、かがみは三人、特につかさに声を掛ける。

「それはそうと。彼、吉井ってヤツに気をつけなさいよ」

そう言ってかがみはほんの少し先を歩いてる明久を視線で指す。

「？　どういうこと、お姉ちゃん」

「彼は観察処分者なのよ。だから、同じクラスなのはどうしようもないとしても、関わったりしたらダメよ。いい？」

「え……？　う、うん」

ピシッと指を立て、残った片手を腰に当ててかがみはつかさにそう告げ終え、今度こそ扉を開けて『すみません。遅れました』と言って教室へと入っていった。

そして教室へ向かう途中、つかさはこなたとみゆきに小声で声を掛ける。

（ねえ、こなちゃん、ゆきちゃん。観察処分者ってなあに？）

（あー、観察処分者っていうのはまあ、あれだね。不良に付けられる肩書きみたいなものだよ）

（まあ、あながち間違いではありませんからね。かがみさんが心配するのも分かります）

（じゃあ、あの吉井って人、不良なの？）

（まあ、そのことは教室に着いたら詳しく説明しますね？）

（うん。おねがいつてほによ～～～！！？」

と、突然つかさは前のめりに『ビターンッ!』と倒れる。どうやら新校舎と旧校舎を繋ぐ渡り廊下の校舎と渡り廊下を繋ぐ部分にある僅かな凹凸につま先を引っ掛けたようである。

「つ、つかさ!？」

「大丈夫ですかつかささん!」

「うう、痛いよう……」

流石に高校生ともなると転んだぐらいで泣いたりしないが、それでも痛いことに変わりはない。更に言えば、膝をほんの少し擦り剥いたのか膝から血が僅かながら出ていた。

「つかさ、保健室に行く?」

「そうですね。とりあえずまずは教室に行って荷物を置いて、先生がいるようでしたら事情を説明して保健室に「あの、大丈夫?」え……?」

突然掛けられた声方向に視線を向けると、そこには明久の姿があった。

「えと、あの……」

突然のことですかさは何を言っているのか分からなくなる。いきなり声を掛けられたこともそうだが、掛けてきた相手が先ほどかみ言っていた明久だったこともある。

「あ、血が出てるね? ちょっと待って」

当の明久はつかさの膝の血を見て持っていた通学バッグを下ろしチャックを開ける。

「えーと、これじゃないこれじゃない。これでもない、あれ？
確かここに……」

目当てのものがなかなか見つからないのか、まるで整理されてないドラえもののポケットの秘密道具が如く目当てのものではない様々なものが出てくる。漫画だったり、PSPだったりDSだったりDVDだったりトランプだったりUNOだったり作りかけのガンブラ（144分の1デルタプラス）だったりそれに使うニッパやデザインナイフだったりガンブラマーカーだったりサンドペーパー（紙やすりみたいな物）だったりダーツに使う的やダーツ本体だったり水の入ったペットボトルだったり塩や砂糖の入ったビンだったりエロぼ……ゲフンゲフン！ 保健体育の参考書（比喻表現）だったりなど、本当にさまざまなものが出てくる。というかお前は何しに学校に来てるんだと言いたくなる。

「えーと……あ、あつたあつた」

そう言っ明久は鞆の底の底からそれを、絆創膏を取り出した。

「えっと、ちょっとごめんね？」

「え？ あ、うん」

そう言っ明久はかがんでつかさの膝に絆創膏（何故か犬柄）を一枚ペタリと張った。

「これでよしと。他に血が出てるところある？」

「ううん。大丈夫」

「そっか。この渡り廊下、他の階と違って段差がほんの少し高いから気をつけたほうがいいよ？」

「うん、ありがとう。でも、何でそんなこと知ってるの？」

なんとなく思った疑問をつかさは口にする。

「ああ、それはね。去年鉄人から逃げるために校舎中を逃げ回ったからね。逃げ切るために校舎内の特長とか覚えてるんだよ。例えば、この窓の何だけど、開けるとすぐ近くに雨どいの筒があってね。そこから下の階に滑り降りることができるとだよ」

「わあ、すごい！」

明久の言うとおりに窓を開けると、確かにそこには雨どいの筒があった。よく見ると手の跡や誰かが滑り降りた跡がある。明久の言っていることは嘘では無さそうだ。

「ホントだー。ねえ、他にはどんなことがあるの？」

「そうだね、他には――」

こなたが持つてるオタク知識とも、みゆきの知っている勉強や雑学などの知識とは明らかに違うその知識（？）に、つかさは興味を持った。そして、色々聞いている内に彼女は無意識に思った。

ああ、この人は悪い人じゃない。すごくいい人だ。

と……。

ちなみに。

「一体どうやってこんなにいろんなものが入ってたんでしょう？不思議ですね」

「あー、モンハン3rdじゃん！こんな近くに同志がいたとはね」

明久の鞆の中身を見て、みゆきとこなたはそれぞれが思ったことを口にしていた。

余談ではあるが、四人が教室に行かねばならないことを思い出すのは一分ぐらい先のことである。

突っ走るバカ（後書き）

感想待ってます。どしどしお願いします。

遅刻と差別、そして美少女の三角形

Fクラス。

それは二年生から他の高等学校と違う特色が完全に現れ始めるこの学園において、最底辺の者たちが集まる場所である。

そしてそれは、クラスによって設備のレベルが変わるこの学園において最低の設備を使用している場所とも言える。しかし……

「あのさ、みゆきさん」

「なんでしよう?」

高低凹凸コンビの片割れ、こなたは己が所属するクラスを見て、コンビのもう一人の片割れたるみゆきに声を掛ける。それはクラスの設備を見たからではなく――

「なんていうかさ、私たちってもしかして道間違えた?」

「いえ、それは無いと思いますが……」

「いや、だってさこの教室――」

こなたは再び己の所属する教室を見る。正確には、その教室の外観。

――ボロボロで、隙間風が入りそうな木製の壁。

――やはりボロボロで、ヒビが入っているところをセロハンテープで補習しただけの、開閉に苦労しそうな窓。

――明らかに立て付けが悪そうで、窓同様開閉に苦労しそうな木製のドア。(一応スライド式)

――ドアの上にある『2・F』と書かれてる木製の板は『F』の部分が明らかに紙で書いたのを貼り付けただけのもので、ち

よつと強めの風が吹いたら剥がれそうである。更によく見れば、『F』の下には『E』の文字が見える。そればかりか、張つてある紙も再生紙なのか裏に何かしら書いてある。明らかにコピーミスかいらなくなつたプリントで作つた即席物であることは目に見て取れた。

「どう見たつて廃墟じゃん」

事実。こんなものを見てしまえば、十人中九人はこなたの言うとおり「ここつて廃墟？」と言いつつである。ちなみに残りの一人は「倉庫か何かですか？」である。まあ、あながちその一人の言っていることは間違ひではない。一部の生徒からは、Fクラスはこう呼ばれてるのだ。

——「バカを入れとく倉庫」、と……。

第二話 遅刻と差別、そして美少女の三角形

「まあ、仕方ありませんよ。これがこの学園の特徴と言えば特徴なのですから」

みゆき自身もそう言っているものの、流石にこの教室の外観には驚いてるらしく、その様子が微妙ながらも顔に出ていた。

「ま、まあとりあえず入ろうよ？ ひどいのは外側だけかもしれないし」

やはりこなたとみゆきと同じく教室のひどいこの外観を見て打ちひしがれていた明久は、気を取り直して言う。確かに、ここで突っ

立っていても仕方が無いし、何も始まらない。

ちなみに、こなたもみゆきも既に明久とは何の抵抗も無く打ち解けていた。つかさがいい橋渡しになったようである。こなたもみゆきも、つかさの人を見る目に関しては結構な信頼を寄せていたりする。

「じゃあ、私から入るね？」

四人の中で、つかさが教室のドアに手を掛けて開ける。――

――のだが、立て付けの悪さゆえなかなか開かない。開くことは開くのだが、ギシギシとスムーズとは言いがたい音が響き、ようやくドアが開く。

「はあ、はあ、すみません遅れまし「早く座れ。このうじ虫野郎」ほよよ……!!? Σ(。ω。)」

突然投げかけられた言葉に、つかさはギョツとなる。だが、そんなつかさよりもギョツとした者がいた。

つかさをうじ虫呼ばわりした、教壇に立っている男子生徒である。

「あ、……つと、す、すまん君！ さっきのは君にじゃなく後ろにいるバカに言っただ！」

慌てて赤毛を逆立て男子生徒は謝罪する。が――

「みゆきさ〜ん。いきなりうじ虫呼ばわりされたよ〜(っ、ゝ)」

その言葉をこなたがワザと自分に言われたものとして演技開始。この瞬間、赤毛ゴリラの運命は決まった。

「なっ！？ だからちよつと待て！ それはそっちのバカに……」
総員、狙ええっ！」「っんな！？」

赤毛ゴリラが慌てて言い直そうとするが時既に遅し。明久指揮の下、既に教室にいた男子があつという間に赤毛ゴリラを取り囲む。

「ちよつと待てお前等！ 何故にあつて間もない奴の指示にそんなすばやく動けるんだ！？」

「黙れ赤ゴリラ！ 女子を泣かす奴に人権は無い！」
「全くだ！ ロリっ娘最高！」

「女子を泣かす奴。それは、世界の敵だ！ 許されたいなら死にさせっ！」

「だからちよつ……まっ……！！！」

以下、効果音にてお楽しみください。

ドガッ！ バキッ！ ドゴゴゴッ！ ズダンッズダンッ！ ブ
ウイイイイイン……バシュウウウンッ！！ ズババババッ！
ドッゴン！ ドッゴン！ ボワワワッ！ ビギビギギッ！ デ
イバイイーン、バスタアアア……！！

「ぎゃああああ……！！！！！！？」

様々な攻撃音が響き渡り、赤毛ゴリラは一瞬の内に人語を解する赤毛のゴリラからボロ雑巾へとジョブチェンジしたのだった。

「ゲホッゲホッ！ はあ、はあ……。と、とにかく。すまなかったな、君。今のは君の後ろにいるバカ面の野郎に言っただ」

そう言つてボロ雑巾はつかさに謝罪する。

「えと、うん。間違いだつたならいいよ……」

「それで雄二？ 何で雄二は教壇に立つてるの？」

つかさは戸惑いながらも許し、明久はそのボロ雑巾……もとい、悪友たる坂本雄二に教壇に立っていた理由を問うた。

「ああ、なんか担任の先生が未だに来なくてな。それに、俺がこのクラスの最高成績者だからな」

「え？ じゃあ雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ。要するにこのクラスの奴等は俺の兵隊ってわけだ」

それは言い換えると雄二を説得するとこのクラスを動かせるという意味になるのだが。

「それで雄二、席順は？ どうなってるの？」

「ん？ このクラスは自由席だと。つうか席順なんて決まってない」

「席順すら決まってないの！？」

「それがFクラスだ」

それを言ったら元も子もないことを、雄二はあっけからんと言ったのだった。

「それじゃあ僕はここに座ろうかな」

「じゃあ、私はここ」

「それじゃあ私はここにするね」

「それでは私はここにしますね」

ちょうど教室の窓際の隅が開いていたので、明久たちはそこを陣取った。一番隅を明久。その右隣をつかさ、その前がこなた、その

左隣（つまり明久からは前の席）にみゆきといった具合だ。

黒板

—
— みゆき こなた

—
— 明久 つかさ

図にすると上記のとおりになる。

「それにしてもさ、吉井君って結構役得だよね？」

「え？ それってどういうこと？」

突然のこなたの言葉に、頭に疑問符を浮かべる。

「いや、新学期にいきなり女子三人と知り合うなんてさ。まるで吉井君ってギャルゲーの主人公みたいだね？」

「ギャルゲーって……。というか泉さん女の子なのになんでそんなゲームしてるのさ……」

女子高生、年頃の女の子がギャルゲーという言葉を手平然と使っていることに、明久は驚く。

「ん？ でもそういうゲームって年齢制限的なものって無かったっけ？」

実際、ギャルゲーなどは制限年齢に差があってもそういったものはほぼ確実に存在する。（実際作者の持ってるヤツにも最大でCE

RO・C（15禁）がある）

「いや、そういうのはお父さんに頼んで買ってきてもらっから」

「（いや、なに頼んでんの！？　というか、買ってきたの！？　泉さんのお父さん！）」

更なる事実にも明久はただ驚愕するしかなかった。

「そ、それにしてもさ。やっぱり外観と一緒だったね？　その、設備とか……」

そう言っつつかさは教室をぐるりと見回す。

腐った畳。

薄っぺらな座布団。

ひびが入って入る窓。

隙間風の入る壁。

ガタガタで、今にも壊れそうな卓袱台。

「確かにそうですね。外だけで、中は大丈夫だと思ったのですが……」

「ものの見事に外と同じだったね？　　というかいまどき床が畳って
いうのが逆にすごいね（-ω-；）」

教室のあまりな現状に、こなた達は絶句するしかない。

「それにしても、遅いね？　担任の先生」

明久は未だに雄二が立っている教壇を見ながらふと呟く。事実、
未だに担任の教師は来る気配はない。

「まさか担任の先生が遅刻だったりしてね」

「あはは、流石にそれはないよー」

「だよね、言ってみただけだよ」

明久とつかさはそう言いあいながら笑いあふ。そこへ……

ドタドタドタツ！ ガラリツ！

「皆席につけーっ！ はあ、はあ、ぎりぎりセーフや」

そこへ一人のスーツ姿の女性が入ってくる。だが、着ているスーツはどこか着崩れていたり、腰まである金髪はボサボサの寝癖だらけだったりなど、明らかに寝坊しましたといった風体である。

「あー、ウチが担任の黒井やつ。皆学年も上ったんやし、いつまでも休み気分であらんで心機一転頑張るよーにっ」

そんな、教卓に前かがみになりながら息を整える彼女、黒井ななこのその言葉に対して、誰もが思った。

『『『『『せ、説得力ねえー……』』』』』

「あー……、それはそうとみんな個人の設備はちゃんとあるか？ 不備は無いかな？」

そんなななこの言葉に、数人が手を挙げる。

「先生。座布団に綿があんまり入ってないんですけど……」

「あー、我慢しい。ちゅーかダメなら自分の家から持ってくるなり買っなりしい」

「先生。俺の卓袱台今にも崩れそう、つてか足が一本折れてるんですけど」

「HR終わったら木工ボンド持って来たるわ」

「先生。窓が割れてるんですけど」

「ピニール袋とセロハンテープを後でやるわ」

「先生。彼女がいらないんですけど」

「先生も相手がおらん。諦めえ」

などなど様々な不備、というより不満が出てくるが、ほとんど（というか全部）が応急処置のレベル。新しいのを申請をするとか、業者を呼んで取替えさせるとかの回答は無かった。

「そっぴや先生。さっき教卓に上って黒板を見たらチョークが粉とクズしか無かったんですが、授業とか色々はどうするんですか？」

今度は雄二が不備の点を上げる。

「あー、チョークはFクラスは……えーと、白だけ申請できるから授業までに申請しとくわ」

チョークすら無いのかというより、白しか使えないのかという事実にも誰もが驚愕した。

「ま、とにかく廊下のほうから自己紹介し」

そんなななこの言葉に、廊下側の一番前の生徒がスクツと立ち上がる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

そう自己紹介する生徒に対して、こなたが挙手をする。

「質問質問」

「む？ なんじゃ？」

「なんで男子の制服着てるの？」

「あ、それ私も思った」

こなたの質問に、つかさが賛同する。

「いや、ワシは男なのじゃから男子の制服であつておるのじゃ」

呆れ顔秀吉のそんな言葉に、こなたはふむ、といった顔をする。

「なるほど、男の娘か。そんな漫画みたいな人初めて見たよ」

秀吉の言葉に、こなたは一人でうんうんと納得する。ちなみに、後ろではつかさが「……男の娘？」と頭に疑問符を浮かべて呟いていたのだった。

「……土屋康太」

次に自己紹介したのは三白眼に寒色系の髪の小柄の男子だった。なぜかポケットから小型カメラがのぞいてる。

「——です。帰国子女ですけど会話は問題ありません。あ、ドイツからなので英語は苦手です。趣味は——」

そんな言葉が聞こえた瞬間。明久がビクツと震えたのをつかさは気がついた。

「……？ どうしたの？」
「え、いやその……」

明久が言い切る前に、その理由は聞こえてきた。

「吉井明久を殴ることです　はろはろー吉井」
「う、あ……。し、島田さん……」

明久は島田という名の女子に怯えたようになる。その反応を見て、つかさにこなた、みゆきは三人とも「？」となった。

「――です。趣味は――」

そんな感じで自己紹介は続いていく。やがて……

「えーと、泉こなたです。よろしく」

こなたの自己紹介（意外とあっさりしたものだった）が終わる。

「えと、柊つかさです。特技は、お料理です。よろしく願いします」
「す」

少なくともこなたよりは物事を言っているつかさの自己紹介。

「高良みゆきです。みなさん、今年一年宜しくお願いしますね」

丁寧なみゆきの自己紹介。そして――

「えーと、吉井明久ですつ。気軽に『ダーリン』って読んでくださ
いね？」

『『『『『ダアア——リイイ——ンッ!!』』』』』

野太い野郎オンリーの声が教室に響く。

「ちょ、……吉井君」

「ごめん……」

作り笑いで誤魔化したものの、流石にこれには後悔したのだった。
その後、ありきたりな自己紹介が進んだところで……

ガラリッ

教室のドアが開かれる。そして入ってきたのは——

「あの、遅れて、すみません……」

「ん、おお。丁度いいわ。今自己紹介しとるから、姫路も自己紹介し」

「あ、はい。姫路瑞希です。今年一年よろしくお願いします」

そう言って彼女、学園次席の少女である姫路瑞希はペコリと挨拶したのだった。

戦いの引き金

第三問 戦いの引き金

「何でここにいますか？」

それが彼女、姫路瑞希に掛けられた質問であった。聞き方によっては失礼としかいえないこの質問だが、質問したくなる理由も分かる。ここはFクラス。最底辺のクラスなのだ。ぶっちゃけバカが集まるクラスといっても過言ではない。

だが、姫路瑞希はその「バカ」には入らない。なぜなら彼女の成績は優秀で、学年次席をみゆきと取り合っているほどののだ。故に、そんな彼女がここにいますのは傍から見てもおかしかった。

「えっと、その実は振り分け試験のときに熱を出してしまいまして……。そして途中退席したので……」

全てのテストの点が0点扱いになり、Fクラスに配属された。要するにこういうことだった。

試験召喚システムを始めとして、この文月学園では様々な取り組みが行われている。そして、その歴史はまだ浅く、いや、歴史と云っていいほど長くはまだ無いこともあり、どこかしらで不具合が生じる。試験召喚システムなら、召喚獣の設定や召喚フィールドなど個々人での差異が原因でどこかでトラブルがあったりといった具合に。

そして、今回の振り分け試験の病気による途中退席に関してもそのうちのひとつだ。試験中になにが、どうして、どうなった場合どうするのか、といった具合の俗に言うマニュアルがまだ未完成なので

ある。今回の瑞希の「途中退席は全教科無得点」という事態も、その試験の試験官の独断がそのまま行使されたような感じなのである。仮にもここは教育機関。当然何年かで他の学校に異動なんてこともある。そうなれば、当然以前の学校で得た常識を以って行動を起こす教師もなんだかんだでそれなりにいる。今回の件もそれなのだ。その試験官のその判断は前の学校で得た常識なのである。（その試験官が前にいた学校は完全なお受験学校だったそうな）

さて、ともかくそんな瑞希の言葉に、教室のアチコチから色々な声がる。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに……』

『ああ、化学だろ？ アレは難しかった』

『俺は弟が事故に遭ったせいで実力を出し切れなくて……』

『だまれ、一人っ子』

『俺は前の晩、彼女がなかなか寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

などといったことがあちらこちらから聞こえる。なんとというか、想像以上にバカだらけである。なにせ聞こえてくるのは自分がこのクラスに配属されたことへの言い訳だらけなのだから。

「と、とにかくよろしく願いますっ！」

そうやって瑞希はぺこりと頭を下げてそそくさと空いている席に向かった。そして空いている席、つかさの横の席に座り、「緊張しましたあゝ」と言っつて卓袱台に突っ伏した。

そんな彼女に、明久は膝立ちで動いて彼女の近くに行く。

「あのさ、姫？「姫路」……」

声を掛けようとしたところで、別の声が被せられる。その事態に明久は一人「ガビン」といった感じの顔をし、それを見たこなたは「ライバルフラグが立ったね」と呟いていた。

「えっと……」

「坂本だ。坂本雄二」

「あ、はい。姫路瑞希です」

そう言っただけで瑞希は明久の声に声を被した本人である雄二に対してペコリと頭を下げる。この辺りに、彼女の育ちの良さが見え隠れしていた。

「それはそうと、もう体のほうは大丈夫なのか？」

「あ、はい。もう大丈夫です」

「あ、そうなんだ。あのときからずっと気になっていたから良かったよ」

「はい。おかげさまで……って、吉井君!？」

後ろを振り向き、そこにいた明久に瑞希は思わず驚く。そんな彼女の反応を見て雄二は……

「姫路。明久が不細工ですまん」

失礼なことを言った。

「そ、そんなつ。目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然不細工なんかじゃないですよ!」

そんな瑞希の言葉に、雄二は「ふむ」と明久を見る。

「まあ確かに、見てくれは悪くないな。俺の知り合いにも、明久のことを気にしてる奴がいたはずだし」

「え！ 雄二、一体それってだ「それって誰ですか！？」「うわっ」

明久の言葉をかき消す様に瑞希の言葉が重なる。

「確か、久保……」

雄二の言葉に、瑞希は自分の記憶にある久保姓の生徒を探し始める。

「……利光だったかな」

久保利光 ↓ 性別『♂』

「……僕、もうお婿に行けない……」

「安心しろ明久。半分冗談だ」

「そうなんだ。よかって、ちょっと待って！ 半分！？ ねえ、残りの半分は！？」

ある意味あんまりな言葉に、明久はなお雄二に追いつがる。実際残りの半分が何なのか、聞いた方がいい気がするのだ。というか、聞かないと色々な意味でやな予感を明久を明久は感じ取っていた。

「おーい、こらソコ。ちょい静かにしい」

そう言ってななこは教卓をドンドンと叩く。すると……

バキィッ、ガラガラガラ……。

あつという間に教卓は教卓だったゴミへとジョブチェンジを果たした。

「あー、たくつ。ちょい代えを用意すつから自習しとり」

そう言つてななこはブックサ言いながら代えの教卓を持つてくるために教室を出て行つた。そして明久はそれを見た後、今度は視線を瑞希に向ける。

「けほつ、けほつ」

教卓が壊れたせいで僅かに埃が舞い上がってしまい、瑞希はそのせいで咳き込んでいた。

「……雄二」

「なんだ？」

「ちよつと話があるんだ。だけどここじゃムリだからさ、ちよつと教室の外に」

「……わかった。いいだろう」

そんなやり取りの後、明久と雄二は教室の外へと出た。

「あの二人、どうしたんだろう？」

なんとなくそれを見ていたつかさが疑問符を頭に浮かべる。

「さあねえ。何かたくらんでるんじゃないの？」

「泉さん。いくらなんでもそれは考えすぎじゃないでしょうか？」

こなたはなんとなく言い、みゆきがやんわりとここにいない二人をフォローする。この辺りに、みゆきの聖人君子ぶりが垣間見える。

「まあ、確かにね。それにしても、観察処分者ってどんな人かなと思っただけど、意外と話せるかもね?」

そう言いながらこなたは明久の鞆の中から色々取り出しては見ている。

「……ねえ、こなちゃん。廊下でも少し聞いたけど、観察処分者ってなんなの?」

「そういえばまだちゃんと説明はしてなかったね。じゃあ、説明してしんぜよう」

Tutorial

かんさつしょうぶんしゃ
『観察処分者』

つかさ(以下つ)「あの、これってなあに?」

こなた(以下こ)「チュートリアルだね」

みゆき(以下み)「チュートリアルというのは、少数の生徒に教師が集中的に教えること、あるいは家庭教師による一対一の教育のことを言います。もしくは、教育用の書籍や、ビデオなどの各種メディア入門部分のことを言いますね」

つ「えーと……」

こ「つまり、初めてのことに對するやり方を教えるって事。ゲームで言う説明書見たいなものだよ」

つ「あー、そう言うことなんだね。でも、何でこんなことするの?」
こ「ちよつとメタなこと言うけど、この作品は「バカテス」と「らきすた」のクロス作品じゃん? だから、中には「らきすたは読

んだことあるけど、バカテスは無いなあ」なんて人がいるかもだからね」

み「ですから、この場合は私たちが「バカとテストと召喚獣」に出てくる設定などを説明するための場所ということですよ」

つ「そうなんだあ」

こ「で、今回は「観察処分者」についてだね。というわけでみゆきさん。説明ヨロ〜」

つ「ええ！？ こなちゃんが説明するんじゃないの!？」

こ「いやいや、ここはみwikiさんの出番だよ。まあ、作者の好みもあって、みゆきさんは結構優遇されるかもだけど、この場合はみゆきさんがやってこそだよ。というわけでみゆきさん。改めてお願いします」

み「はい。まず、「観察処分者」というのはここ、文月学園のみで採用されている試みの一つです。具体的に、成績が悪く、学習意欲に欠け、更に素行不良の生徒が認定の基本対象になります。この観察処分者に認定されると、その生徒の召喚獣には以下の制約が加わります」

？召喚獣の物理干渉の付加

？疲れ・痛みなどのフィードバックによる感覚共有

み「そして、その召喚獣を使い教師の監視下のもと、奉仕作業を行います」

つ「奉仕作業？」

み「召喚獣は点数が一桁でもかなりのパワーを発揮します。そのパワーを使つて、本来なら数人で行う力作業を行います」

こ「ただし、フィードバックの影響で相応の疲れが来るけどね」

み「そして、召喚獣がダメージを受ければその何割かが召喚者に行き渡ります」

こ「だから、そう簡単には召喚出来ないんだよねえ」
つ「えっと、それじゃあ本編に戻りますっ」

L u c k y S t a r

しばらくすると、明久たちは教室に入ってきた。それとさほど間をおかずななこも代えの教卓を重たそうに持ちながら入ってくる。ちなみに、代えの教卓もボロだった。

「よしっ、そんじゃあ自己紹介の続きをすんで？」

そうだななが言い、再び自己紹介が始まる。

そんな中、つかさは明久にさっきなんで雄二と一緒に教室を出たのか聞いてみた。が、

「ああ、それはもうすぐ分かるよ」

「???」

明久の思わせぶりな言い様に、つかさは疑問符を浮かべるだけであつた。

「さてと、あとは坂本だけやな。坂本はこのクラスの代表やったな。最後にビシッと頼むで」

「了解しました」

そう言つて雄二は教壇に上る。そして雄二に全員の視線が集まる。

「さて、俺は坂本雄二。このFクラスの代表だ。坂本でも代表でも

そしてあちらこちらから不満の声が上る。普通ならそれを分かっててこの学園に来たんだろうと言いたいが、このあまりな設備の差を見るとその言葉すら飲み込んでしまう。

どうでもいいことだが、もともとこのFクラスの教室設備はここまで酷くはなかった。確かにボロではあったが、少なくとも普通に学園生活を送るには充分な状態だった。しかし、毎年毎年Fクラスに配属されるのは成績不振の生徒ばかり。当然中には観察処分者はいなくとも、不良と言える者もいた。そして、自分の努力不足を棚に上げ学園に対して文句を言うばかり。そしてこの状態に腐ったFクラス生徒は物を大切に扱わなくなり、次第にボロでも見方によつては年季が入っているといえるこの設備はボロボロになっていった。腐った畳に関しても、真面目に掃除しなかったことが積み重なり起こったことだ。要するに、腐る↓それを見てやる気をなくす↓更に腐る。と言った悪循環が起きていたのだ。

「さて、だからこそ俺はFクラス代表として提案する」

そう言つて雄二はFクラスの生徒を見回す。そして言つた。

「俺たちFクラスは、Aクラスに対して試験召喚戦争を仕掛けようと思つー!!」

おまけ

吉井明久 召喚獣設定

ユニットクラス B a d s t u d e n t

装備 頭 なし

体 改造学ラン（黒）

足 なし

武器 木刀（櫨の木製）

腕輪 ???

戦いの引き金（後書き）

はいどうも！。第三話書きました。今回からそれぞれの召喚獣のデ
ータを乗せようかと思っています。一番苦労するのは多分ユニットケラ
スの名前だと思うので、この人にはこれっ！と言っ方はどうぞ。募
集しています。

脱兎がごとく

『勝てるわけがない』

それこそが、雄二の宣言に対するFクラスの面々の回答であり、反応だった。とはいえそれも仕方が無いと言える。AクラスとFクラスとでは、総合的な成績の優劣はもちろん格も違う。テストの数も、正に桁が違うのだ。真剣且つ必死に勉強してからならこの宣言に対して分からなくてもないが、今は新学期が始まってまだ一日目なのだ。もちろん勉強などしてゐるわけが無い。

「そんなことは無い。絶対に勝たせてみせる」

『何をバカな』

『できるわけが無いだろう』

『何の根拠があつて言つてゐるんだ』

『姫路さんがいれば何も入らない』

『高良さんの胸に顔を埋めたい』

『勝てるわけが無い』

『俺の妹がこんなに可愛いわけが無い』

『おい、ホントに誰ださつきから!？』

雄二の言葉に、様々な返答が帰ってくる。それも仕方が無いものだった。

「根拠ならあるさ。このクラスにはAクラスに勝つための要素がそろっている」

『要素……だと?』

「ああ。それをまず紹介してやる」

第三問 脱兎がごとく

「さて……おい康太。姫路のスカートの中を清々しさすら覚えるくらい堂々と覗いてないでこっちに来い」

「……！？（ブンブン！）」

「は、はわっ！？」

雄二の突然の言葉に瑞希の座る卓袱台の下にその身を屈め、正に言うとおりに瑞希のスカートの中にある聖域を見ようとしている小柄な男子が首をブンブン振り、その男子に気がついた瑞希が慌ててスカートを手で押さえた。

「さて、こいつは土屋康太。まあ、名前の方は聞き覚えの無いやつの方が多だろう。だが、こいつこそがあの有名な寡黙なる性識者^{ムツリーニ}だ」

そんな雄二の言葉に、クラス中がざわつき始める。

「バカなっ！ 奴がムツリーニだと！？」

「奴がそうだというのか……？」

「だが見ろ、未だに頬についた畳の後を隠そうとしているぞ」

「ああ、ムツツリに恥じない行動だ」

そんな彼等の言葉に当のムツツリーニは頬を摩りながらブンブンと首を振る。なんとも器用なものである。ちなみに、ムツツリーニというあだ名は言うまでもなくムツツリスケベからきている。それゆえに男子からは羨望と尊敬を、女子からは軽蔑と侮蔑を集めている。

「試召戦争において情報は重要だ。そしてこいつはそういったことの収集力がある。だから、ムツツリー二には情報収集の役割をになっってもらふ。さて、次は木下秀吉」

その言葉に全員の視線が秀吉に集まる。

「秀吉は演劇部のホープだ。そして、秀吉の特技が『声帯模写だ』」
『『『『『!?!?!?!?!』』』』』

誰もが驚いた。なぜなら雄二の声が二つ重なったかのように聞こえたからだ。

『このとおり、大抵の声、音ならある程度再現可能だ。まあ、やるならやるである程度準備が必要だがな』

秀吉は雄二の声で説明する。それはある意味壮観であつた。

「さてお次は、姫路瑞希、そして高良みゆきの二人だ。お前等もこの二人の成績に関しては知っているだろう?」

「わ、わたしですか?」

「わたし……ですか?」

「そう、お前達二人はFクラスのワイルドカード、切り札だ。期待と同時にあてにもしている」

『そつだあの二人がいるんだ』

『そつだよ。この二人ならAクラスにだって負けない』

『姫路さんと結婚したい』

雄二の説明にあちらこちらから様々な声が上る。

「そして当然、俺も全力を尽くす」

『坂本つてたしか昔神童って呼ばれてなかったか？』

『そうなのか？　じゃあFクラスになったのはあの二人と同じで調子が悪かったのか？』

『だとしたらAクラスレベルが二人もいるってことか。これはもらったな』

「そして、吉井明久もいる」

——しん……

「つて、雄二！　何でここで僕名前を出すの！？　必要ないよね！？」

ただ一人、明久だけが声を上げる。

『だれだ吉井つて？』

『さあ、売れないピン芸人か？』

『聞いたこと無いぞ？』

そんなクラスメイトの言葉に、雄二はニヤリと笑って言う。

「そうか、知らないなら教えてやる。コイツ、吉井明久は観察処分者だ」

『なんだと、観察処分者！？』

『まさか、奴が……』

そんな戦慄をするクラスの中で、スツと手が上る。

「あの……」

「なんだ、姫路？」

「観察処分者ってなんですか？」

「観察処分者っていうのは、普通の生徒には与えられない称号だ。成績が悪く、学習意欲の無い奴に与えられる」

「バカの代名詞とも言われておる」

「何の役にも立たない奴のことよ」

「……ザコ」

雄二の言葉に秀吉、美波、ムッツリーニの辛辣としかいえない言葉が明久に突き刺さり……

「わあ、すごいんですね？」

瑞希のトドメの一撃が与えられた。

「皆嫌いだ！」

そう言っ明久は教室を脱兎がごとく飛び出したのだった。

「！？ まずい、待て明久！」

そんな明久の行動に、雄二は慌てた表情になる。

「みんな、急いで明久を捕まえる！ 急いでだ！」

「どうしたのじゃ雄二。いきなり」

「もし、明久がなんかの拍子に他のクラスと接触して、今回の試召戦争の件を知られたら大変だ。下手すりゃ対策を立てられる。それに……」

「それに？……」

「明久はDクラスに宣戦布告をさせるためのいけに……大使だからいてもらわないと困る」

「お主、最低じゃな……」

「まあとにかく。みんなで明久を探し出してくれ。あ、ちなみに姫路と高良は教室から出るなよ？ お前らのことは最重要機密なんだからな。当然、探す奴は試召戦争の件を他のクラスの奴に言うなよ？」

そんな雄二の言葉に、全員が頷き教室から出て行ったのだった。

利用価値、存在意義（前書き）

さて、なんか鬱な感じのタイトルですが、そんなことはありませんので。

利用価値、存在意義

Fクラスの面々が明久を探し始めて十分近く。Fクラスの男子はそれぞれゾロゾロと適当に探し回っていた。適当なのは理由がある。まず、先ほど雄二がした明久の説明。アレを聞いて、明久が戦力として使えるのかと聞かれたら、間違いなくNoと応えるはずである。先ほどの説明で分かったことは、明久は観察処分者であること、フィードバックがあるからおいそれと召喚できないことだ。そして最後に言われた辛辣な言葉で、Fクラスの面々は、明久は完全な役立たず、もしくはスケープゴートという認識ができていた。だからこそ、だれもそこまで真剣に明久を探そうとは思わないのである。役立たずを探しても、何のメリットも無いからだ。だが、そんな彼を、真剣に探している人間がいた。

第五問 利用価値、存在意義

唯一真剣に探している人物。つかさはこなたと一緒に明久を探していた。

「いや、それにしてもこうして見ると結構広いなこの学園」

頭をポリポリと掻きながら、こなたは辺りを見る。が、どこにも明久の姿は無い。

「どこに行っちゃたんだろっ、吉井君……」

「……ねえ、つかさ」

「ほえ、なに、こなちゃん？」

「なんでさ、つかさは吉井君を探すの？ そんなに真剣に」

「え……？」

突然掛けられた質問に、つかさは疑問符を浮かべた。

「だってさ、さっきの様子を見ても吉井君はソコまでいなくちゃいけないようには見えないでしょ？」

「そう、なのかな……。よくわからないけど、探さなきゃって思ってる」

「ふーん。それじゃあ、ここでちょっと分かれようか。私はまだこの階を探すからさ、つかさは屋上を探してよ」

「え、うん。わかった」

そう言ってこなたは階段の所でつかさと分かれ、つかさは屋上に続く階段を登っていった。

L u c k y

S t a r

ゴォン……

少々重量感のある鉄製の扉を開け、つかさは屋上へと出た。春の風が、つかさのライトパープルの髪を微かに波立てた。

そんな、春の情景を感じさせる屋上の隅に……

「うう……ひどいやひどいや……皆して、寄って集って……（つかさ）」

うじうじと、地面に八の字を書きいじける明久はいた。

「あの、吉井君……」

「……！ 柊さん」

「その、大丈夫……？」

何気なく、そう言ってみるつかさ。が……

「柊さん……人間てね？ ちょっと高いところから落ちただけで死ぬるんだよ？」

そう言う明久の視線は、金網の向こう側を向いていた。

「ちょ、ダメ！ ダメだよ吉井君……！」

あまりな発言に、つかさはギョツとなる。

「だって……さ。確かに僕はバカだけど、だからってあそこまで言わなくてもって思うよ……。あそこまで、差別みたいなことしなくてもさ……」

そう言って再びうなだれる明久。それを見て、つかさは、気がついた。なぜ、ここまで彼を必死に探したのかを。

そう、似ているのだ。昔の自分と、幼かった頃の自分と……。

「吉井君。似てるね、私と……」

「え……？」

そう言いながら、つかさは屋上の金網の向こうを見る

「私ね、昔……小学生のころ、吉井君と同じ事を感じたことがあったんだ。私のお姉ちゃん、何でもできたんだ。勉強も、スポーツもだけどね？ 私は何もできなかった。勉強もできないし、スポーツだって苦手。いつも、クラスの男子にバカにされてて、いつも泣いてた」

「……………」

「それでね？ そんな時、お母さんが教えてくれたんだ。「まずは、自分ができることは何かがあるか探してみたら」って。それから私、考えて、見つけたんだ。自分ができること、これだけは自慢できること。えと、だからさ、探してみようよ、一緒に。吉井君ができること、これだけは自慢できるって事」

そう言って、つかさは明久に手を差し伸べた。

「探せる……かな？」

「私も協力するよ。だから、探してみよう？」

「……うん」

そう言って、明久はその手をとった。

L u c k y

S t a r

明久の逃走から二十分。ようやく明久は教室から戻ってきた。そんな明久に対して。

「ようやく戻ってきたな、生に……明久」

「雄二。今絶対に生贄って言おうとしたよね？」

「気のせいだ、スケープゴート」

コイツとは一度しっかりと話し合うべきだと思った瞬間であった。

「まあ、それはともかく。明久、Dクラスに対して宣戦布告の大使をして欲しい」

「何で僕なの？」

「これは、お前だから、いや、お前しかできないことなんだ」

「へー、そうなんだ」

「ああ、そうなんだ」

雄二の説明に、明久はわざとらしく頷く。

「だけどさ、僕は役に立たないんだよね？ 特に島田さんは何の役にも立たないって言ってたし」

「いや、それは……」

「そんな役立たずじゃ、そんな大役できないからさ、他の人にやってもらいなよ」

そう言って、明久は自分の席に戻った。

「頑張ろうね、アツ君」

「うん。つかさ」

そんな、親しい二人のやり取りを見て、こなたは「フラグを立てたね」と呟いており、みゆきは疑問符を浮かべていたのだった。

利用価値、存在意義（後書き）

つかさとのフラグが立ちまくりですね……（^^；）

作戦会議、そして食事情

結局、Dクラスへの宣戦布告の大使は須川を始めとした数人が行くこととなった。ソコまでやるなら自分がすれぱいいのにと、明久は雄二を見るが、当の本人はどこ吹く風である。須川たちが戻ってきて、僅かにボロボロであることに關しても、我關せずであつた。

第六問 作戦会議、そして食事情

さて、場所は再び屋上になる。そこに、明久、雄二、秀吉、ムツツリーニ、つかさ、みゆき、こなた、瑞希はいた。理由はミーティングをするためである。

「それで雄二。結局、Dクラスとはいつやるの？」

「ん？ ああ、午後に開戦予定だ」

明久の問に、雄二はそう答える。流石に正確な時間は伝えられなかったようである。

「それにしても、なんでDクラスなの？ 普通に考えたらEクラスからなんじゃない？」

「まあ、普通に考えればそうなんだが……。明久、今お前の周りに

どんな奴がいる？」

「えーと……」

そう言われ、明久は周囲を見渡す。

「ゴリラが一匹と美少女が四人。ムツツリが一人とロリが一人いるね？」

「誰が美少女だと!？」

「……（ポツ）」

「ちょ!？ まずい、僕だけじゃ突っ込みきれない！」

ちなみに、聡い読者諸君なら言うまでも無いが、あえて表記しておく。

ゴリラ↓雄二

美少女↓つかさ・みゆき・瑞希・秀吉

ムツツリ↓ムツツリー二

ロリ↓こなた

「ま、まあともかく。今の俺達には姫路や高良といった戦力がある。いくら上位クラスとはいえ、Eクラスなら戦うまでも無い」

「ということは、Dクラスは確実ではないのかの？」

「まあ、絶対とは言えない」

秀吉の言葉に、雄二は頷いて応える。

「Dクラスは百点台がそれなりにいる。百点台どころか、五十点台すら怪しいウチじゃ難しいからな」

「まあ、強いと無敵はイコールじゃないからね」

こなたもそう相槌を打つ。

「それに、Aクラス攻略のためにはDクラスを倒す必要がある。勝てる勝てないの問題じゃない」

「まあ、どちらにせよ開戦は午後からなんだし、まずはお昼だね」

「そうなるな。明久、今日ぐらいはまともな飯を食えよ?」

「そう言うなら、パンぐらいおごってくれると嬉しいんだけど……」

「……? 吉井君って、お昼食べてないんですか?」

瑞希の質問に、明久はほんの少し視線を逸らした。

「……いや、食べてるよ?」

「アレを食べてると言えるか? お前の主食、塩と水だろう?」

「失礼な! ちゃんと砂糖だつて食べてるよ!!」

「……砂糖は食べるとは言わない」

「舐めると言う方が正しいのう……」

「し、仕送りが少ないんだよ!」

そのあまりな明久の食事情を目の当たりにしたつかさ達であった。

「アツ君。ちゃんとご飯は食べないとダメだよ」

「確かに、水と塩分と糖分があれば人間はある程度は大丈夫ですが

……」

「いるもんだね。漫画とかに出てきそうな食事情の人って」

「それにしても、アツ君って仕送りで生活してるの? お父さんとかお母さんは?」

ふと思った疑問をつかさは口にする。

「いや、ただ仕事の関係で海外に行っててさ。そのせいなんだよ」
「ま、そのせいでまともに生活できてねえんだけどな」
「うるさいぞ雄二」

そう言い合う二人に、瑞希はほんの少しだけ前に出て……

「あ、あの吉井君。それでしたら、私が作ってきましようか？ その、お昼ご飯」

「え？」

「うん。ソレはいい考えかもね？ だったら、皆で作ってこようよ」
「はい、それはいいかもしれませんね？」

こなたの考えにみゆきも同調する。

「えと……本当にいいの？」

「はいっ大丈夫です」

明久の間に、瑞希は快諾したのだった。

「よしっ、そんなじゃあ飯の話はこれまでにすっか。いいか、俺達は……最強だ。俺達なら、絶対Aクラスに勝てる。見せつけてやろうじゃないか！」

そんな雄二の言葉に、その場の全員が頷いた。

それからは、全員で簡単な作戦を立てたりなどして解散となった。ちなみに、明久とつかさはこなたに互いを名前で呼び合っていることを追求されていたのだった。

……それから。

「それはそうと、柊」

「なに、坂本君？」

「今回の試召戦争。お前の姉には俺達とは関わってないって言えよ。もし、聞かれたならな」

「え？ どうして？」

「……アイツのことだ。もしお前が俺達に何かしら関わっていると知ったら、絶対にうるさいことになるからな」

こんな会話が、誰にも知られない内にあったのだった。

現実はそう甘くない

その日の午後。新学期初日だというのにFクラスとDクラスの試験召喚戦争は開始された。戦況は、はっきり言えばFクラスは劣勢だった。もともとFクラスは基本的に勉強ができない、しない、したくない、の連中が集まっているのである。むしろ、みゆきや瑞希のような、事情持ちとはいえ秀才な人間がFクラスなんかにいるのがおかしいのである。

そして、件の二人は切り札として前戦に出てはいない。雄二の強引なアジで最初は高かった士気も、一人二人と戦死していくうちに段々と下がっていく。あまり良い状況とは言えなかった。

そんな良くない状況の前線で、つかさはこなたと二人で戦っていた。片やエプロンにフライパンと盾代わりの鍋蓋を持ったつかさの召喚獣。片や、紅い鎧に剣と、かなりいい装備のこなたの召喚獣。

二つの召喚獣は、次々に掛かってくる召喚獣をザシュッ！と切り伏せ、時にはフライパンのスパコーンッ！という音と共に吹っ飛ばす。

どうでも良いが、片方はともかく、片方は攻撃がヒットした、なにともしゃべり音のせいで微妙に緊張感が欠けていた。

この前線が完全に絶望状態になっていない要因の一つがこの二人だった。ヤマさえ当たればAクラス並みの高得点をたたき出すこなた。点は低くとも、こなたの背中を守るようにフライパンをブンブン振り回すつかさ。そして……

「なん……とおっ！」

そう言いながら、相手の召喚獣の攻撃を往なし、顔面に攻撃を喰わね、相手を戦死させる明久の召喚獣。

表示されている点数ははつきり言っただけ低い。だが、明久にとってはそれで充分なのだ。観察処分者というレッテル。フィードバックがついてくるマイナス要素にしか見えないこのレッテルにも、受けられる恩恵がある。

それは、高い操作技術である。観察処分者の仕事は大抵が召喚獣を使った力仕事。人間はほぼ無自覚で物事の効率を良くすることがある。明久の場合は、より無駄の無い、高い操作技術を得ることだった。操作に慣れれば当然無駄が減る。そうすれば、無駄に費やす体力の消耗を抑えることができる。そういうことだった。その結果、明久は、己の点数の2〜3倍（運がよければ4倍）の相手とも普通に渡り合える。相手によっては圧倒できる。

「（僕だってやれる。この力は、誇れるものだ！）」

屋上でのつかさとの会話。あの会話で、明久の中でさまざまなものが吹っ切れた。

認めよう。自分はバカだ、点数は低い。最底辺のクラスでも、更に下の方だ。だけど、自分にはこの操作技術ちからがある。これだけは、誰にも負けない。

「（ありがとう、つかさ）」

心の中で、明久はそうお礼を言った。自分の中の可能性を見つける切っ掛けになった彼女に。

第七問 現実はその甘くない

「さあ、どんどん来い！！」

そんな明久の啖呵に、その場にいたDクラスの生徒が明久を標的にし始めた。

「舐めんな、Fクラス風情が！」

Dクラス 出木慶 物理 98点

そう叫ぶDクラス生徒の一人が召喚獣を召喚。ブレイドアックスを振るって明久の召喚獣を攻撃する。明久の召喚獣はそれを避け、相手のブレイドアックスを持つ腕を足で蹴飛ばし、相手の召喚獣のバランスを崩したあと、一気に咽元に木刀を思いっきり突き込んだ。

ドガッ！

木刀とはいえ、咽元に突きこまれば只ではすまない。咽に与えられたダメージに、吹っ飛ばされ、後頭部を強打したことにより相手の召喚獣は戦死した。

「戦死者はあ、補習うつうつうつー！！！！！！！！！！」

そして、どこからか現れた鉄人西村により、首根っこつかまれて

さて、本作でも、いや、この作者の書くバカテス小説のお決まりになりつつある事が起きていた。

「行きますわぁー、お姉さま!!」

「くうっ!」

島田美波と清水美春。この二人が廊下の外れで戦っていた。

もともと、明久は美波を前線に出ていた。だが、劣勢になりつつある戦況を何とか支えるために二手に分かれたのである。そして、美波は色々な意味で因縁のある清水美春に見つかり今に至る。二人の戦いははつきり言って美波が完全に不利であった。操作技術は完全に互角。そうなれば後は点数の差だった。そして肝心の点数は

Fクラス 島田美波 化学 53点

VS

Dクラス 清水美春 化学 94点

40点もの差があった。明久ならいざ知らず、美波にとってはどうにもならない点差だった。事実、明らかに力負けしており、今にも体勢を崩されそうである。

「お姉さまに捨てられて以来、美春は一日千秋の想いで待っていますわ!」

「ちよっと! いい加減ウチのことは諦めてよ! それにウチは男が好きなの!」

「嘘ですっ! お姉さまも美春の事を愛しているはずですよ!」

「このわからずや!」

強気で言い返すが、それだけでどうにかなる物でもなく。そのまま美波の召喚獣は体勢を崩され、倒れこむ。さらに、手に持っていたサーベルもカラカラと音を立てて離れたところに転がった。

「さあ、お姉さま。ここまでにしましよう?」

「いやあ! 補習室はいやあ!」

「補習室? 違いますわよ?」

そう言つて美春は美波の手をとつてどこかへと歩いていく。

「ちよつ! どこへ連れて行くつもり!?」

「お姉さま……。今なら保健室のベッドは空いてますわ(うつとり)

「ひっ! ちよ、吉井! 援護を……」

そう言つて助けを求めて辺りを見回す。が、

「そこつ! ふっ!」

「ちいっ! Fクラスのくせして!」

明久は目の前の相手に夢中。こなたとつかさを始めとする他のFクラス生徒も自分の目の前の敵に夢中であつた。

「さあ、行きましようお姉さま? エ・デ・ンへ」

「いやあああああ—————!!!!!!?」

その後、Dクラスとの試験召喚戦争中、島田美波と清水美春を見た者はいない。

安定・不安定（前書き）

一応Dクラス戦は終了です。とはいえ、今回は雄二視点なんです。

安定・不安定

DクラスとFクラスの最前線が衝突して二時間ほど。

Fクラスの教室には、回復試験を受けている生徒がそれなりにいた。もともとFクラスは点数が低いため、それなりに早めに回復試験を受ける必要性があるのだ。

そんな回復試験を受けているクラスメイトを軽く見ながら、雄二は一人「ふむ」と頷いてノートに何かしら書き込んで考えている。

「坂本君。何を考えているんですか？」

Fクラスに待機中のFクラスのワイルドカードの一人、瑞希はおずおずと聞いてくる。

「ん？ ああ、何。只の戦略を変更したりしてるだけだ。意外と耐えてるからな、ウチのクラスの前線部隊」

「あの、坂本さん。それはもともとはそんなに持たないと思っていた、ということですか？」

そう言ってくるのは瑞希同様Fクラスのワイルドカードのみゆきだ。

「まあ、な。普通に考えたって、そうだろ？ 仮にもこっちは学年最底辺。向こうは二つ上のランクのクラスだ。善戦する方がおかしいんだよ」

そう言いながら、雄二は卓袱台の下から用紙の束を取り出した。

「坂本さん。それは？」

「うちのクラスの成績表。ま、棒グラフで書かれてるから、正確な点数は分らないがな」

そう言つて、「見るか?」と言わんばかりに手渡してくる。みゆきはそれを受け取り、パリリ、パリリと捲っていく。

「……分かつてはいたことですが、低いですね。点数」

「当たり前だろ。何しろ学年最底辺だぜ?」

「それなら、ちゃんと勉強してから仕掛ければいいのでは……」

確かに、みゆきの言い分ももっともである。只でさえ低いFクラスの成績。それだというのに新学期初日に試召戦争をするのは無謀以外の何ものでもなかった。

「それじゃあ、遅い。クラスの連中がこの設備に慣れちまう」

そう言つて雄二はクラスの男子を見回した。

「あの、坂本さん」

「ん?」

と、成績表を見ていたみゆきが何かに気がついた顔で聞いてきた。

「この成績表を見て思ったんですが……。島田さん、結構高いですよ、数学」

「ああ、今回は高かったな」

「今回は……?」

「これがもし、ムツツリー二の保健体育みたく、常時Aクラスレベルってなら問題は無いんだがな」

「それって、どういうことですか、坂本君」

と、話を聞いていた瑞希が話しに入ってくる。

「ま、姫路と高良は知らなくても無理は無いんだが、アイツな、数学が得意ってことになっちゃいるが、結構点数に波がある」

「それは、どうしてですか？ 坂本さん」

「アイツはドイツからの帰国子女。本人曰く、相変わらず漢字がダメらしい。それがアイツの数学の点数に波がある理由だ。言っちゃえば、あいつ数学のテストを虫食いみたいなことしてんだよ」

「虫食い……ですか」

「ああ。漢字がダメだから、文章題が全然ダメ。だから、アイツは単純な計算問題しか手を出さない。だが、計算問題は配点が低い上に、問題数も少ない。例えば百点取るとして、アイツはそのためにテスト用紙を五枚使う。その際計算問題だけを探す時間。計算問題を解く時間。新しいテスト用紙を貰う時間。そして、問題の最後まで見て採点する教師。只普通に、問題解いて、採点してもらってだけのことが、アイツにしてみればかなりのロスを生んでるんだ」

「あ、だからなんですね。あの時、勝てるための要素のとき島田さんを上げなかったのは」

「そういうことだ。リスクが高い癖して得るリターンが少な過ぎる」

淡々と、雄二はそう告げた。

「ま、冷たい言い方だが。いつまで帰国子女を理由……いや、言い訳にする気なんだか……」

そこまで話した所で、教室の扉が開き、須川亮が入ってくる。

「坂本、吉井からの指示で数学教師が来るのを防いで欲しいという

ことなんだが」

「ふむ、そうか。明久の癖してなかなか考えるな。よし、須川。ちよつと耳かせ」

「？」

「いいか？ まず放送室に行つて……ゴニョゴニョして、モニョモニョ……するんだ」

「ああ、わかつた」

そう言つて須川は頷き、教室を出て行つた。

「あの、坂本君。一体何をするんですか？」

「なに、今に分かる」

そう言つ雄二の顔は、はつきり言つて凶悪だつた。

やがて……

ピンポン パンポン……

『数学の船越先生。数学の船越先生。吉井明久君が体育館裏でお待ちです。教師と生徒の垣根を越えた、男女の話があるそうです』

そんな放送が終わつた瞬間、雄二は腹を抱えて爆笑し始めた。そして……

『す……須川ああああああー……………！！！！！！』

そんな明久の叫びが木霊したのだつた。

「あゝ、笑つた笑つた。さて、そろそろDクラスの代表が痺れを切らして出てくる頃だな。よし、姫路。作戦通りにいけよ」

「え……あ、はい！」

そう言って瑞希は立ち上がり、教室を出て行く。恐らく前線へと向かったのだろう。

それからしばらく。Dクラス代表平賀源二は、姫路瑞希によって倒され、Dクラスとの戦争はFクラスの勝利に終わった。

朝と、お弁当乱舞（前書き）

ゼルダが面白すぎて放置しました、すいませんです。
さて、ともかく。あの兵器が登場します。

朝と、お弁当乱舞

雀の鳴き声と、どこからか聞こえる鶏の鳴き声で、朝が来た事を
実感するそんな朝。

「~~~~~」

柊家のキッチンで、つかさは鼻歌を歌いながら調理をしている。
基本的に柊家では、彼女と母親がこの場所を使う。彼女の父や、上
の姉たちも使わないことは無いが、それでも二人と比べると、稀で
あった。

「あら、つかさ。今日は早いよね？」

「あ、お母さん」

そこへ、一人の女性。彼女の母がキッチンへ入ってくる。

なんというか、容姿を見て、勘違いしやすい人がいたとしたら、
間違いなく「あの、おかあさんってお名前なんですか？」と問うか
もしれない。そんな容姿である。皺も、シミも無く、若々しいその
容姿ははつきり言っただけに社会人の娘をもつ母という感じではない。
むしろ、結婚1〜2、3年目の母親と言った方が信じる人が多いだ
ろう。それこそ、二十代前半で通じる。

まあ、そんなことよりも。つかさはふとしたことを思い出し、母
親、柊みきに問うた。

「ねえ、もう少し大きい目のお弁当箱って無いかな？」

「もう少し大きいのか？ 昔お父さんが使っていたのがあるけど、ど
うしたの急に？」

「え？ えっと、今日のお昼は皆で食べるからっていうのもあるん

「ただ……」

「けど？」

「そのうちの一人の男の子がね？　お昼はあんまり食べないから」

そう言われ、みきは納得した。確かに、食べるのが男子では普段使っているお弁当箱では小さい。

「そういうことね？　わかったわ、ちょっと待ってて」

そう言って戸棚を開けて、ごそごそと探し始める。その間、つかさはお弁当の仕上げに取り掛かる。そしてその間にみきはお弁当箱を見つけ出した。

「はい、あつたわよ？」

そう言ってみきは大きな目の、紺色の弁当箱をつかさに渡す。

「ありがとう、お母さん」

「それじゃあ、ちょっとお洗濯してくるから」

そう言ってみきはキッチンから出て行く。そして、つかさは貰った弁当箱を一度洗ってから、作ったおかずを詰めてお弁当を完成させた。

ベランダに出て、洗濯の終わった洗濯物を干す。そんなみきの顔には、ちょっとした笑顔があった。

「青春ねえ」

思わず、そう呟いていた。

第九問 朝と、お弁当乱舞

Dクラスとの試召戦争から翌日。この日の午前は昨日消費した点数の補充試験。そして、午後はBクラスとの試召戦争の予定である。そして、朝のHRにて。

「えゝほんなら欠席を取るでゝ」

担任の黒井先生による出欠確認……する前に。

「あゝあとな。今日、島田は休むそうや」

そう告げた。

「あの、先生？ 島田はどういう理由で……？」

気になったのか、雄二がそう聞いてくる。

「あゝ、その、な……」

すると、黒井先生は少しバツの悪そうな顔をする。

「正直言つとな。よくわからへんのや」

「分らない？」

「ああ、なんでも、もうお嫁に行けないとか何とか……」

「……は……？」「……」

その説明を聞いて、誰もが意味分からんと言わんばかりの顔をした。

「ま、何はともあれそついうこつちゃ。ほんなら今日も勉学に励むように」

そつ言つて黒井先生は名簿を軽く上げて教室を出て行つた。

何はともあれ、今日の午前は補充試験で潰れる事となつた。だが、もともと勉強に関してはもはやアレルギーと言つても過言ではないFクラスの男子にとっては、何にも勝る苦行であつた。

「う”あ”ゝゝづがれ”だゝゝゝ」

四時間目の終わりを告げるチャイムがなった瞬間、明久は卓袱台に突っ伏した。

「よっし、今日の昼飯は炒飯にラーメンにカレーにすっかなっ」

それでありながら、雄二は疲れを感じさせないような動きで立ち上がりそう言う。

なんというか、炭水化物の摂り過ぎである。

「およっ？ 坂本君。昨日の約束を忘れてない？」

と、そこにこなたが会話に割り込んだ。

「うん？ …… ああ、そーいやそーだったな」

言われて思い出したのか、雄二はポンツと手を叩いた。

「私も作ってきたよ？」

そう言っつつかさはお弁当箱を鞆から取りだす。

「あのう、お恥ずかしながら、私も作って来ました」

そう言っつみゆきも鞆から弁当箱を取り出す。

「それじゃあさ、こんなところで食べるのもなんだし、屋上で食べようよ」

明久の提案に、雄二・秀吉・ムツツリーニ・つかさ・みゆき・こ

なた・瑞希達は賛同し、屋上へと向かった。

ほんのり暖かな風が、春の香りと桜の花びらを運ぶ。それらを肌で感じながら、明久はグツと背伸びをした。

「ふゝ、いい天気」

そう呟く明久を尻目に、お弁当を持ってきた女性陣はテキパキと準備を進めていた。ちなみに、雄二は飲み物を買ってくるために、今この場にいない。

「あの、あまり自信は無いんですが……」

そう言いながら、瑞希は持ってきたお弁当を開ける。その中身を見て、男子陣は「おおっ」と声を上げた。エビフライにポテトサラダ。野菜炒めにキンピラゴボウ。ご飯は白米に（明久はそれでも充分すぎるほどののだが）ふりかけがかかっていた。

「ご賞味くだされば幸いですね」

次はみゆき。蓋を開けると、またしても男子陣は声を上げた。エビチリにほうれん草のおひたし。そしてなにやら大振りな玉子焼きにイチゴが二つ。そしてご飯には鮭フレークがかかっている。

「ふっふっふ、それでは私のもご開帳なのだよ」

そういつてこなたも開ける。これまた男子の歓声がる。唐揚げに野菜サラダ。出し巻き卵にミートボール。そして海苔べん状態のご飯だ。

「それじゃあ、私も」

そういつて、最後につかさも開ける。そして、やはり男子の歓声がる。玉子焼きにアスパラのベーコン巻き。プチトマトのサラダに竜田揚げ、そしてご飯にはごま塩がかかっている。

「すごい……というか、皆作って来たんだね？」

「そりゃまあ、昨日そういつたしね。そういつた以上すつぽかすわけにはいかないよ」

こなたは明久の問いに腰に手を当ててそう応えた。

「それじゃあ早速（ひよい）あ、ずるいぞムツツリー二つ」

まずは瑞希のおかずを取ろうとしたその横から、ムツツリー二がエビフライを掠め取る。そしてそのまま口入れて租借をする。――

――瞬間。

ドサッ！ ビクンビクンッ！

.....
僅かな間。

「む、ムツツリーニ？」

明久のオズオズとした問いに、ムツツリーニはゆっくりと立ち上がり.....

「.....（ぐっ）」

そのままサムズアップ。だが、瑞希につかさ、そしてみゆきという天然トリオを覗いた全員が、ムツツリーニのボクシングの負けボクサーのようにフラフラな足に視線が注がれていた。

「（.....秀吉。あれ、どう思う？）」

明久は近くにいた秀吉にアイコンタクト。

「（少なくとも、演技には見えん）」

そのまま少し、こなたを含め、三人は考える。考えている内容はこれが夢か現かということだ。できることなら夢か、もしくはどこからともなく『ドッキリ大成功！』と書かれたプレートを持った雄二が笑いながら現れてくれることを祈ったが、現実はそう甘かない。

と、そこへ.....

「お、なんだ。もう食べ始めてたか」

いくつかの種類の缶を持った雄二が屋上に現れた。

「ほお、これが女子が作って来た弁当か。どれ……」

そう言いながら、雄二は“瑞希の弁当”からキンピラゴボウをつまんで口に入れる。

（パク）ドサリッ。ガシャガシャガシャッ。

「さ、坂本君！？ どうしたんですか！？」

自覚無き必殺（↑ここ重要）料理人の瑞希が、突然倒れた雄二に駆け寄る。

……間違いない。こいつあ本物だ。

その場の三人の心が一つになった。

そして、僅かに視線を動かした雄二は明久を見て、

毒を盛ったな？ アイコンタクトで言う。

「（違うよ。姫路さんの実力だよ）」

同じように、明久もアイコンタクトでそう返した。

「だ、大丈夫だ姫路……。ちょ、ちょっと足がつつてな……」

息も絶え絶えになりながら、雄二はそう応えた。それを見て、明久は思った。

優しい奴だ、と……。

だから、その優しさを十二分に利よ……活用してあげよう。とも

……

「姫路さん。高良さん。つかさ」

「？　なんですか、吉井君」

「何でしょうか？」

「なあに、アツ君」

「あれ、何だろうね？」

そう言つて明久は何も無い青空を指す。まあ、あるといえば雲があつたりするが、その辺は今には気にしてはいけない。そう、重要なのは二人の視線をこの場から逸らすこと。そして、その僅かな間に

……

「（オラアアッ！）」

「（モゴオオオッ！！？）」

瑞希の弁当を全て雄二の口に押し込んだ。そして、飲み込みやすいように租借を手伝つてあげることも忘れずに。

波乱の弁当乱舞は、まだ始まったばかりだ。

お弁当の脅威と、Bクラスに対して（前書き）

なんとなく考えたんですが。もしかしたら、この作品。雄二×翔子
じゃなくなるかもしれません。はい。じゃあ雄二の相手はとい
うと……

《続きを読む》

お弁当の脅威と、Bクラスに対して

姫路瑞希は才媛であると同時に努力家である。この事実が、特に努力の結果が彼女の成績が常に上位に位置する所以である。

だが、と屋上にいる四人。明久、雄二、こなた、秀吉は思っ。その努力を、もっと別の方向に向けられはしないか、と。そう、例えば……

「早起きをして、時間もあつたのでデザートも作ってきました♪」

今正に、嘘偽り無く自分等の命に対して猛威を振るっている存在。料理、とか……。

『この世に希望なんて無い。あるのは絶望だけ……』

ふと、明久は昨日の夜にやったゲームのヒロインの台詞をなんとなく思い出し、今なら共感できると思った。

第十一問 お弁当の脅威と、Bクラスに対して

ふとしたことから訪れた、昼休みという名の地獄。しかも地獄の使者本人はその辺りの自覚が無いのだからたまったものではない。まあ、能書きはともかく。

「（ねえ、泉さん。どうする、これ？）」

「（いやはや、なんとも……）」

今はこの状況から脱することが優先だ。

「（唯一の救いが、つかさと高良さんが気づいてないことが……）」

「（そだね。じゃあ、吉井君。ココは一つ）」

「（そうだね、そうしよう）」

そう。ココは一つ、さつきと同じ方法を試す以外ない。そう。自分達の、約束された勝利の剣を。エクスカリバー

「ああ、姫路さん、つかさ、高良さん！ あれはなんだ！？」

そう言って何も無い所を指差す。だが、それでも三人は律儀に指差す方向を向いた。

「（ふざけんな明久！！ 次やったら俺は確実に死ぬ！！）」

「（大丈夫！ 僕は、僕たちは雄二を信じてるから！！）」

そう言って明久は爽やかな笑顔でサムズアップ。だが。

「（黙れ！ だまされんぞ！！ そんな熱血少年漫画みたいなノリで言われてもな！！ 次はお前が食え！！）」

「（ぎゃあ！ 人殺しいー！！！！）」

ココまでのやり取りにかかった時間。僅か二秒。だが、その間に雄二は瑞希手製のデザート（白い何か）を手に取り明久に迫る。

「（……ワシが行こう）」

そこに、救世主が現れる。今まで、事態の流れを見ているだけだった秀吉だ。

「（そんな！ ダメだよ秀吉！ 死んじゃうよー！）」

「（おいコラ。俺のときと全く対応が違っじゃねえか……）」

思わず雄二はそう突っ込むが、今はそんな時ではなかった。少なくとも、明久にとっては。

「（大丈夫じゃ。ワシはジャガイモの芽くらいなら食べることができ鉄の胃袋じゃ）」

「（ジャガイモの芽って……確か毒じゃ……）」

こなたの意外と真面目な突っ込みは普通にスルーされる。そしてその間に秀吉は雄二からデザートの入った容器を受け取ると、自前の箸を持って……

「（いざ……！）」

ガツガツガツ……！

一気に中身をかっ込んだ。そして……

「ムグムグ……。なんじゃ。意外と普通ゴバアツ！」

散った。命という名の儚い命が。

崩れ落ちる自称鉄の胃袋を見て、明久たちはそう思うしかなかった。

どうでも良いが、ここまでで僅か十五秒程度の出来事である。

「あれ？ もう食べちゃったんですか？」

と、先日ほど秀吉が倒れた音が聞こえたのか、瑞希がこちらを向いた。

「え、ええと……そう！ 秀吉、甘いものが好きだって言ってたから！」

「あう、そうなんですか……」

「そうそう！—（……？ どうしたんだろう、姫路さん。なんだか残念そうだけど……）」

そんな疑問を抱いたものの、明久はたいして深くは考えなかった。
なぜなら……

「それじゃあ、つかさ。いただくね？」

「うん。どうぞ、召し上がれ」

ここ数ヶ月。ようやくまともな食事にありつけたのだから……。

（ Lucky Star ）

「それで雄二。今度はどこと戦うの？」

地獄（比喻にあらず）の食事が終わり。ムッツリー二と秀吉は雄二が買ってきたお茶を飲ませてなんとかした後、明久は雄二に今後の今後のことを話しかけた。

「ん？ ああ、Bクラスとやる」

「Bクラス？ Aクラスとかじゃなくて？」

「ああ。Aクラスと戦うのに、どうしてもBクラスと戦う……いや、勝つことが必要なんだ」

「でも坂本さん。Bクラスが必要とは、どういうことでしょうか？」

と、みゆきがそう雄二に問いかけてくる。Aクラスと戦うのにBクラスに勝つことが必要。とだけ言われても、理由が想像できないのだ。

「ああ。それなんだが、すまん。まだ全部を言ってやるわけにはいかねえ。最低でも、Bクラス戦が終わってからじゃねえと」

「そうですか。それが必要と言うのなら、とやかくは言いませんが……」

「なんだ、高良？」

「いえ、ただ、今度は誰かを犠牲に、という作戦だけはしないでくれると嬉しいと思ひまして」

みゆきの言い分も分かる。なにせ昨日のDクラス戦は、表に出ないだけで実際のところ、かなりの人数が戦死しているのだ。ただ、Dクラスの代表を燻り出す、それだけのために。そのせいで、明久も、こなたも、つかさも戦死一步手前だったのだ。

「ふー……そうしてやりたいのはやまやまだが、そうもいかねえ。なにせ、成績の最も低いFクラスが戦う以上、ある程度の犠牲は考慮しなきゃならねえ」

「でしたら、せめて皆さんの成績が上がるまで……」

「それもムリだ。高良、お前は知ってる以前に当たり前のことだが、勉強なんてものは進めば進むほど難しくなるんだ。だとしたら、せめてまだその“難しい二年生の問題”が出てくる前、要するに一年生の時の問題が多いうちにやったほうがいい。ま、アイツ等のことだから一年生の問題でもあまり意味はねえだろうけどな。ほとんど気休めだが、そういう配慮はしないよりは良い」

「なら、皆さんの勉強意欲を上げれば……」

「それもムリだ。Fクラスにいる奴なんざ、『勉強なんて嫌い』『勉強なんかやりたくない』『勉強なんかやらなくてもいいじゃん』みたいなやつらの集まりだからな、いわば」

「……」

みゆきにも、思い当たる節があるのだろう。そのまま、黙ってしまった。

「ま、ともかく俺達の次の目標はBクラスだ。そうでないと、Aクラスに勝つ方法が完全に無くなると言っても良い。気を引き締めていくぞ」

「……？ 勝つ方法が無くなるって、どういうこと、雄二？」

ふと気がついたことを、明久は問う。

「……正直に言えば、普通にやったら俺たちはどんな作戦を用意してもAクラスには勝てない。その状況を打破するには、Bクラスに勝つ必要があるんだよ。さて、昼休みが終わる前に、須川辺りに宣戦布告の使者を頼むか」

そう言って、雄二は立ち上がり屋上を出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9522w/>

バカとテストとラッキー スター

2011年12月20日16時51分発行